
クロス・ウォー・ゲーム 果て無き欲望と儂き願いを胸に宿す者達

XXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・ウォー・ゲーム 果て無き欲望と儂き願いを胸に宿す者達

【Nコード】

N7152Y

【作者名】

XXX

【あらすじ】

世界は決して一つではない………並行して存在している数多の地球、『パラレルワールド』。その中には、人智を越えた異能の力を持つ者が存在する並行世界も少なくはない。では、その『異能者』を自分達のいる世界に呼び出し、使役することができたら？そして自分達の異能者同士を戦わせ、勝利した『二組』に願いを叶えられる特権が与えられるゲ

ームが

あるとしたら？ これは………自分自身の欲望、願いを叶える為に命を賭けて戦った者達の物語である。

プロローグ 始まる物語

昔、どこかの偉い学者か何かが、こんな事言った。

『世界は決して一つではない。今、我々がいる宇宙とは別固体として幾千の宇宙がある。そしてその宇宙には同じ太陽系と地球が存在する。』

しかし、同じ地球といつてもどこか違う所が存在するだろう。何故なら同一ではあるが、別固体でもあるからだ』

正直言つて、ありえないな。仮にそんなモノがあつたとしても

『俺』には興味ない。俺の名前は『神谷 光』。

ごくごく普通の高校生の筈だっただが……何の因果も因縁もなく謎の人外に命を狙われていた。え？ どうしてかって？んなこと、こつちが聞きたいわ！

俺なんかしたっけ?! あ、もしかしてアレ中学の時にジャ プを借りパクした大西君? ってんなわけないか……大西君、あんな丸っこくて一頭身じゃないし、仮面つけてないし、何よりれつきとした

人間だし!!!

そしていつの間にか追いつかれた。

そいつの姿はさっき言ったように丸くて一頭身、体色は蒼く、手袋のような手には一本の変わつた形をした西洋剣。

一見すると何かのマスコットキャラのヌイグルミと違ってしまいが、ヌイグルミは人を殺さないし、それ以前に動かない。それによく見てみると

ヌイグルミじゃなくて、れっきとした『生き物』ってのが分かる。

「少年。大人しくしていれば、私は君に危害を加えるつもりはない。ただ私に関する記憶のみを脳内から消去させてもらうだけで、君の命を取ろうとは思っていない。だから…むっ！」

丸っこい奴は何かの気配みたいなのを感じて、空を見上げた。それに釣られ俺も空を見上げた。

魔王。その姿を見て俺は自然とそう思った。

漆黒の色と血のような色の配色に魔性を感じさせる緑色の複眼、そして何よりその存在感がその場の空気を震わせ、すべてを圧倒させてしまう。

「これは……なんと運のいいことだろうか。ライフエナジーを喰らいに来ただけなのだが、こんな所で『異能者 アブノーマル』に出くわすとは…
面白い……ふん！」

突然魔王みたいなヤツが力んだような声を出し、その上に数本の紅い西洋剣が出現し、俺と丸っこいヤツを串刺しにしようと

「グツ……ウオオオオオオオ……！！！」

馬の化け物がどこからか一本の剣を取り出して、丸っこい奴に攻撃を仕掛けてくる。

その腕力は強いみたいで、少し丸っこい奴が押されてる。するとあの魔王みたいな奴が……

「ふん… シュツ」

「！！… ツ グクツ！！…」

一本の短剣を飛ばして、それが丸っこい奴の左腕を斬り裂く。そのせいで形勢が大きく変わり、丸っこい奴が劣勢になった。

「クツ！ てめえ…何汚い手使ってたよ！」

「うん？ 何だ貴様。人間風情が俺に意見するとか？」

「ああ、そうさ！ 降りて来い！ この ブシュウウウウウ！」

突然俺の身体が切り裂かれ、俺は無造作にその場に倒れる。なんで身体が切り裂かれたのかは分からないが、これだけは確かな事実だった……俺は今、ここで死ぬ。

「！！ッ 少年！ グワアアアアアアアアアアアア！！」

切り裂かれた少年を見て俺を助けようとした丸っこい奴。
でもその隙をあゝの馬の化け物は見逃さず、鋭い一閃を繰り出して丸っこい奴を切り裂き、吹っ飛ばした。

「ア…ア…ア…」

俺は満身創痍になりながらも立ち上がり、丸っこい奴を助けようと向かうが……

「ハッ！ コイツは驚いた。まさか見ず知らずの他者を助けようとするとは……人間とは実に、滑稽な生き物だな！」

「ガハッ！！」

いつの間にか俺の背後に立っていた魔王っぽい奴が、俺を嘲笑いながら俺の背中を蹴り飛ばす。

(やばい……このままじゃ……あの丸っこい奴が死んじゃう！)

俺はそう思った。自分もこんな様なのに他人の心配なんて……
確かにおかしいさ……でも……それでも…俺を助けてくれたあの丸っこい奴を助きたい。状況からして、今いる場所は廃墟の建物の

魔王が動き出そうとしたその時！

グオオオオオオツ！！！！

「！！ツ チイツ！」

いきなりあの馬みたいな化け物が魔王めがけて吹っ飛んでいくが、魔王のヤツはそれを一振りの拳で粉碎し、馬の化け物はステンドガラスの欠片となって消滅した。

馬の化け物がふっ飛ばされて来た方角を見ると、あの丸っこいのが左腕に血を流し、ボロボロの状態で立っていた。

「はア、はア、はア……力が全開でないとはいえ、化生如きにやられすぎたな……」

「……………ここは引くが次にあつたその時は、貴様等まとめてキングたるこの俺が判決を言い渡す……………」

そういつて魔王みたいなヤツは、黒い霧みたいな物体になってその場を去って行った。

残された俺達はホツとする。けどその瞬間、重傷のせいと緊張が切れたせいで、俺の意識はそのままブラックアウトした。

そこはどこかは分からない。ただ白く何も無い空間という所だけは説明できる。いや、何も無い……というのは不適切だ。

人はいた。その顔は人形のように白く、

瞳はライトブルーとダークグリーンのオッドアイ。

目の前には宙に浮くモニター画面があり、ゆっくりと丁寧な感じで作している。

「『クロス・ウォー・ゲーム』の参加者は、

異能者 アブノーマル を召喚したばかりの少年を含めて11人。

とはいえ……まだまだ増えるかもな。強い願いを持つ者はこの私を

引き寄せ、私は彼らに願いを叶えるチャンスを与えるだけ……

さあ、この私に面白く美しい『戦争』を見せてくれ……参加者諸君」

その人……いや男はニヤリと楽しそうな笑みを浮かべ、

ただ淡々とモニターの作業をこなしていた……

『クロス・ウォー・ゲーム』……それは異なる次元に存在する地球
……すなわちパラレルワールドから

異能の力を持った者『異能者 アブノーマル』を召喚し、それら
を用いて戦うゲームである。

最後に残れるのは『二組』のみ。敗北者には『願いを諦めた上での
リタイア』か、

『願いを諦め切れずに死ぬか』の二択しかない……そして今宵、

『第3回 クロス・ウォー・ゲーム』がその幕を開ける！！

さあ……ゲームという『戦争』の始まりだ！

プロローグ 始まる物語（後書き）

第1話 ゲーム参加の覚悟/動き出す者達

そこはとある西洋風の屋敷。

屋敷内には多くの絵が飾られ、秀困氣的に豪華な物だった。

しかしこの屋敷には今、1人の男しかいないばかりか、静寂が屋敷内を奄々と支配している。

そして男は、自分の部屋で高価なイスに座りながらワインを傾けており、その顔はどこか

楽しそうだ。男がワインの味に悦楽を感じているのをイイことに、あの魔王のような姿の男が

彼の時間を邪魔するようにその姿を現した。

「早いご帰還ですね。収穫の方はいかに？」

「うむ。まあ中々のモノだったな……この街の人間どものライフエナジーは。」

それにアブノーマルが二人も見つかった」

「そうですか」

「しかし取り逃がしてしまった。まあ正確には此方側から引いた、というのが正しいだろう」

そういつて魔王は、『変身』を解除し本来の姿へと戻った……その服装は

ロックミュージシャンのような風貌で髪型は血のような赤色のオールバック。

その眼の瞳は先程の姿と同様、緑そのモノである。

彼は手に持っていたワインを木材でできたデスクの上に置き、

引き出しからグラスを取り出すと、そのグラスにワインを注ぎ男に渡す。

渡されたワインを、男はゆっくりと傾けその香ばしい匂いを嗅いで

口に含んでいく。

「クク……うまいな。……そういえば今日は、『乱戦の夜』という企画があったな」

「はい。ゲーム参加者の何人かが一箇所に集まり、小手調べ程度に乱戦を行うというモノですね」

「うむ。今日俺に出くわしたアイツ等も参加するだろう……『殺せぬ』というのは癪だが、

アイツ等に直接俺の実力を見せてやるのも一興というもの。さて、企画の時が来るまで

俺はその辺を散策する……この並行世界、なかなかどうして面白い」

「お気に召して頂けましたか？」

「ああ。いろいろと愛で様もあるというモノだ……では、首尾はまかせたぞ」

「御意……」

男…『アルカード』はそう言つと、黒い霧と化し、窓の隙間から外へと出て行つた。

それを確認するや否やなふう…つと、溜息を吐いた。

「やれやれ。王様の接待も楽じゃないな……」

誰に言つわけでもなく、一人の男…『刈谷 殊峰』はそう呟いた。

その頃…一人のごくごく普通の高校生『だつた』少年は、自分自身に起きた非現実

眼を疑っていた。目の前にはあの時、自分を助けてくれた黒い衣装の少女と丸く蒼い一頭身の

仮面の剣士が二人揃って座っており、真剣な様子で見っていた。

ちなみに此処は少年の寝室で、少年…『神谷 光』はベッドで状態を起こした態勢で

二人を見据えていた。

「えっと……とりあえず助けてくれたのと、俺を俺の家まで運んでくれてありがとう。」

で……君とその……丸っこい奴は何？」

「丸っこいのではない、私の名は『メタナイト』…それより君はゲームの参加者だったのか？」

「ゲーム？」

「……どうやら知らないみたいですね。なら、尚更説明しなければ

なりません」

黒い衣装の少女……『キュアブラック』は語り始める。

それぞれどうしても叶えたい願いを持った人間が参加し、並行世界
パラレルワールド から

異能の力を持った者 アブノーマル を召喚。それらを用いて戦う
生存戦争という名のゲーム。

勝者は『願いを叶えられる特権』を与えられ、敗者は『ゲームのり
タイヤ』か『命を落とす』かの

二択のみ……参加者はプレイヤーと呼ばれ、アブノーマルを従者
として使役し、闘いにおいて

サポートをするのが役目である。

そして従者であるアブノーマルには5つのクラスに分けられており、

接近戦を得意とし、体術で敵を屠る『ファイター 闘士』

遠距離戦を得意とし、狙撃によって敵を射る『スナイパー 狙撃手』

防御力に特化、加えて近距離戦と耐久戦でその力を発揮する『ブローカー 守護者』

理性を喪失させ、狂気によって攻撃性や身体性能を強化させる『クレイジ 狂乱者』

数多の武器を自由自在に操り、接近戦ともに遠距離戦に優れた『コマンダー 兵士』

以上となっている。そしてアブノーマルには、『必殺の一撃』とも言うべき

武器、もしくは固有としている能力『ボルトアーマー』をもっている。

このボルトアーマーによって勝負が決まる場合もあり、戦局を大きく左右する

『一撃必殺』であり、『最終兵器』と言っても過言ではない。

「と、説明すればこんな感じですか……何か質問は？」

「……いや、何と云えばいいのか……」

「無理もない。巻き込まれたのも同然でこの『クロス・ウォー・ゲーム』に

参加してしまったからな……しかし何故、君は『サモンカード』を持っていたんだ？」

「サモンカード？」

『サモンカード』という単語に？を浮かべる光に、メタナイトは丁寧に説明を始めた。

「サモンカードというのは、アブノーマルを召喚するに必要なカードのことだ。」

カードはこのゲームの運営者であり管理者『ウェヤース 神なる者』によって与えられる

筈なのだが……記憶に無いのか？」

「うーん……確かあの時、オッドアイで変わった服装の男からカードを貰ったんだ。」

『来るべき時にそのカードは、異邦の者を招き寄せるだろう』て、言っただけのまま消えたんだ」

「うむ。話からしてその者がウェヤースだろうが………光殿、君はどうするつもりなんだ？」

このゲームは『殺し合い』が前提とされている……ゲームへのリタイアは可能だ。

そうすれば君はいつものように日常に戻れる。私としてはその方がいいと思うのだが……」

「……私も同感です。貴方は何も知らずこのゲームに参加してしま
った……。」

ならば、今すぐにもこのゲームから退場した方がいいと思います」

メタナイトの提案に、キュアブラックが同意の声を上げる。

しかし光自身、その提案には賛同できなかった……何故なら話を聞け
ば、

クロス・ウォー・ゲームはアブノーマルを用い互いに殺し合うゲー
ム。

自分がこのゲームから離脱したとして、その後で彼女とメタナイト
はどうなる？

そう疑問に思い、それを言葉として紡ぎ出した。

「……『処刑 デリート』されるでしょう。元もと『願いを叶
えられる特権』というのは

言わば一種の不思議な『力』のことで、それを幾つかに分けたモノ
が私達の『命』として

宿っています……理由は『既に死んでいる』からです。アブノーマルは異能の力を持った者で

あると同時に、何かしらの理由で命を落とした者達でもあります。

その死者を蘇らせ使役し、互いの願いの為に覇を競い合う……それが『殺し合い』という名の

遊戯、クロス・ウォー・ゲームなのです……」

キュアブラックから語られた残酷な現実には、光はしばらくの無言の上で答えた。

「俺は『クロス・ウォー・ゲーム』に参加する……俺の恩人の二人が消されるなんて嫌だし、

何より二人を見捨てるなんて、できないしな」

「しかし……！」

「キュアブラック。彼の眼をよく見る。彼は一度決めた事は決して曲げない信念を宿し、

それは鋼鉄よりも硬い……ならばこそ、光殿の判断を受け入るしかない」

「……分かりました。ならば、もう一度ここに誓いを立てましよう」

キュアブラックはそう言ってゆっくりと立ち上がり、拳を光の前へ突き出して

高らかに宣言した。

「私の名は『光の使者』キュアブラック！　これから貴方を狙う敵を討つ『剣』となり、

あらゆる敵の攻撃から守る『盾』となります。この拳を掲げ、貴方をこの手で守ると誓います！」

今日、この日……極々普通の高校生だった少年は『普通』ではなく
なり、

『殺し合い』という日常に、その身を投資する事となった……

場所は変わり、とある一軒のマンションの一室。

そこに紫色をしたツインテールの少女と、赤みがかった茶髪に

赤い特殊スーツのようなモノを着用した少女が部屋に在籍していた。

ツインテールの少女はベッドの上に座りながらテレビを凝視し、

一方の紅いスーツの少女は壁に背を預けながら立っており、

その横には彼女の『一撃必殺の武器』と言える真紅の二又型の槍が
部屋の明かりに照らされ、

光り輝いていた。

そして時刻はもうすぐ5時33分になる……

それを確認したツインテールの少女に視線を移した。

「あと数時間もすれば『乱戦の夜』ね……準備はいい？『アスカ』」

「完了よ『カガミ』。でも『乱戦の夜』ねえ、……随分とめんどく
さい企画を考えるモノだね。

このゲームの運営者は」

「でも、この『乱戦の夜』は『お互いの情報収集』という意味合い
もあるわ。

第1話 ゲーム参加の覚悟/動き出す者達(後書き)

どうも皆さん！XXXXです。

いろいろあったものの、第一話を更新できましたが、どうでしょう？

一応、自分なりに頑張ったつもりなので愉しんでこの小説を見て頂けると

嬉しい限りです。ちなみに『赤いスーツの少女』と『白い服の少女』は

誰だか分かりましたか？ まあ赤いスーツの女の子は、いろいろとヒントも

あったので十分に分かると思いますが、白い服の女の子はどうでしょう？

ヒントは『ひぐらしの鳴く頃に』の有名なキャラクターです。

それでは、また次回に！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7152y/>

クロス・ウォー・ゲーム 果て無き欲望と儂き願いを胸に宿す者達

2011年11月24日02時53分発行